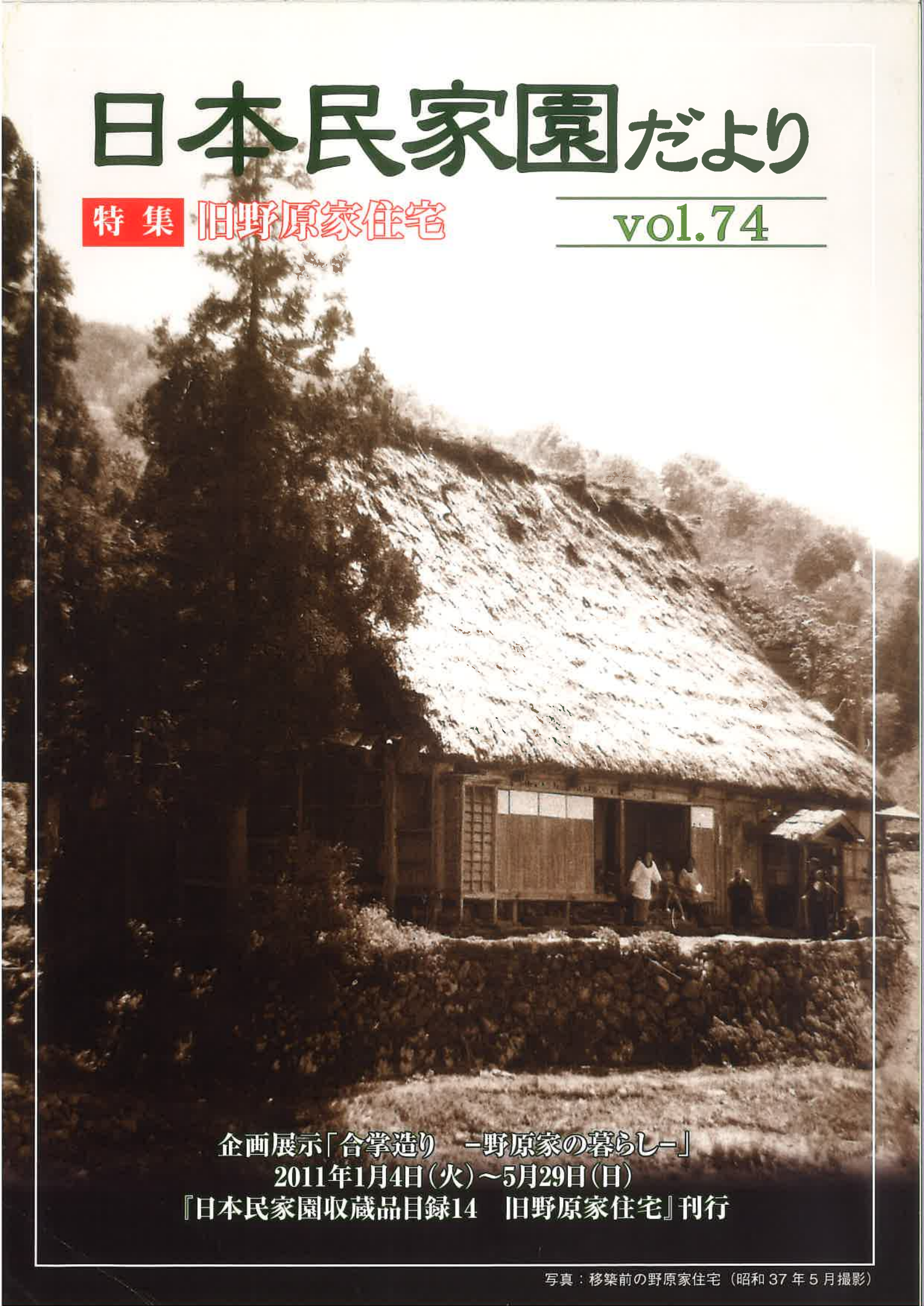
日本民家園だより

特集 旧野原家住宅

vol.74



企画展示「合掌造り　－野原家の暮らし－」
2011年1月4日（火）～5月29日（日）
『日本民家園収蔵品目録14　旧野原家住宅』刊行

写真：移築前の野原家住宅（昭和37年5月撮影）

南砺市利賀村（2010年7月撮影）

はじめに

神奈川県重要文化財・旧野原家住宅は、富山県南砺市利賀村より移築されました。18世紀後期に建てられた、いわゆる五箇山の合掌造りです。昭和40年（1965）11月解体、42年（1967）3月復原。当園は同年4月1日に3棟で開園しましたが、そのうちの1棟がこの野原家でした。

野原家住宅のあった利賀村は、JR高山線越中八尾駅から1日2本のバスで約1時間の場所にあります。険しい山に囲まれた標高545mほどの土地で、家々は利賀川の深い谷筋に点在しています。かつては同じ村内でも集落（「ムラ」と呼ばれていた）が違えば言葉も違うと言われ、家の使い方も異なっていたそうです。

今も便利とは言い難い土地ですが、道路やトンネルが整備されるまでは文字通り僻遠の地でした。教員採用試験に受かっても辞令に「利賀村」と書いてあるとそのまま辞める人もいた、そんな話も残されています。

利賀の冬は長く厳しいのが特徴です。気温が氷点下となるうえ雪が深く、近年でも平成10年(1998)の冬は積雪が5mを超えたそうです。かつては雪が降り出せば、翌年5月頃まで交通が途絶えてしまいました。

五箇山

五箇山とは、富山県の南西端にある南砺市の旧平村・旧上平村・旧利賀村を合わせた地域のことです。五箇山という地名は、この地域が赤尾谷・上梨谷・下梨谷・小谷・利賀谷の5つの谷からなるため「五箇谷間」と呼ばれたことからきており、これが転じて「五箇山」となりました。

五箇山には、倶利伽羅峠の戦い（1183）で破れた平家の残党が落人として逃げ隠れたという言い伝えがあります。戦国時代から江戸時代には塩硝（火薬の原料）製造の歴史があり、石山合戦（1570～1580）で織田勢に対抗した一向宗の門徒は、五箇山の塩硝を使ったとされています。塩硝は民家の囲炉裏の下などで主に製造されていました。

五箇山はまた民謡の宝庫とも言われており、数多くの民謡が今も残っています。

合掌造り

岐阜県北部から北陸にかけて茅葺きで角度の急な屋根を持つ家が多く見られますが、その中で富山県五箇山地方、岐阜県白川郷にある民家のことを合掌造りといいます。屋根の形が手を合わせた時の形に似ていることから、合掌造りと言われるようになりました。五箇山の菅沼集落・相倉集落、白川郷の萩町集落はユネスコの世界遺産にも登録されています。

合掌造りは、両側から「人」の字形に寄りかかった部材が棟木で交差する形になっています。これを扠首（さす）構造と言います。屋根の急斜面は豪雪地帯の雪を落ちやすくする意味もあり（ただし合掌造りでも、雪下ろしをしないと一冬で倒壊してしまいます）、そのために柱や梁も太くなっています。

また養蚕のための広い空間を確保するために、合掌造りが生まれたとも考えられています。

（「五箇山」「合掌造り」の項　遠山健一朗）

野原家の生業

利賀には産業が少なく、長男以外は村を出るのが普通でした。足尾銅山や外国に行ったという話も残っていますが、主な就職先は京都の西陣でし

た。西陣には利賀村の会館もあります。

野原家は主に、農業と炭焼きで生計を立ててきました。稲作畑作いずれも行いましたが、傾斜地のため田はわずかでした。米を自家分賄えるようになったのは、畑を一部開拓した昭和30年代以降のことだといいます。

養蚕は昭和30年代初めまで行っていました。周辺では合掌造りの2階部分でもやっていましたが、昭和20年代以降は野原家では主にデエと呼ばれる1階の板の間を使っていました。

野原家で大きな現金収入となったのが炭焼きです。毎年、村の親方の指示で焼く場所を決め、5月に炭窯を作り、11月頃まで続けました。焼き始めると1週間ほど泊まり込みとなり、帰るのは焼き上げた炭を下ろす時だけでした。炭焼きの期間、家にいるのは年寄りと子どもだけという日が多かったそうです。焼き上げた炭は炭俵に入れます。材料はカヤですが、屋根に使用するものとは種類が違い、山には炭俵用のカヤバが別に設けられていました。

なお、五箇山には煙硝作りの歴史がありますが、野原家で行っていたという記録や伝承は残されていません。

野原家の暮らし

合掌造りの屋根は大きなものですが、村では互いに手を貸しあい、3、40人で片面を1日で葺き替えました。大変だったのは雪下ろしです。下ろすためには屋根に上らなければなりませんが、屋根にはそのための鎖が常に下げてありました。なお、雪の多い年に2階から出入りすることはありましたが、野原家では2階や3階に寝起きする人はいませんでした。

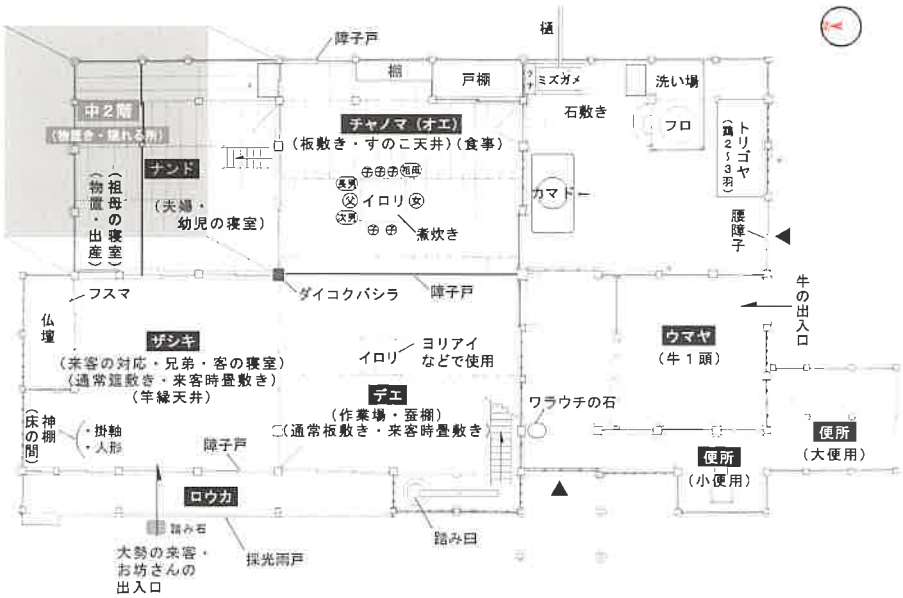
野原家の人々（昭和10年代末頃）

家の中を見てみましょう。入ると右手はウマヤになっていますが、昭和20年代以降、飼われていたのは出荷用の肉牛でした。土間の奥には水場があります。丸太をくりぬいた樋から湧き水が流れ込み、幅120cmほどの石の水槽には1年中水があふれていました。風呂場が設けられていたのもこの場所です。床上の間取りは、民家園に復原された建築当初の様子とは多少異なっていました。居間に当たるオエは、民家園では大きな広間になっていますが、移築前は中央に間仕切りがありました。寝室に当たるナンドも移築前は2つに分かれ、奥の部屋は通常は物置のようになっていました。野原家ではお産があるとこの部屋を使い、当時は座って産んだため、産婦がつかまるための紐を梁から垂らしたそうです。このほか、ザシキは仏間とひと続きになっていましたが、来客時以外は畳を隅に積み、1年を通してムシロ敷きにしていました。

冬、村が雪で閉ざされてしまうと、行商も来なくなります。そのため、食糧の確保に町まで出なければなりませんでした。数軒から代表が出て、雪の中、往復8時間の山道を担いだのです。これを「ボッカ」といいました。粕漬けや干物など日持ちするものではありましたが、魚もこれでようやく食べることができました。

利賀は浄土真宗の盛んな地域で、冬は毎週、寺でオコウサマが開かれました。念仏を唱え、食事を共にすることが、長く厳しい冬の楽しみの1つでもあったのです。

（「五箇山」「合掌造り」以外の項　渋谷卓男）



移築前の間取り（聞き取りによる）

野原家関係資料

バクタロウ
雪ぐつと異なり、雪が入り込まないよう前合わせになっている。

ウソ
つま先に掛ける。防寒用。

フンゴミ
かかとに掛ける。防寒用。

ハバキ
脚のすねに巻く。

イシカチ
建物の基礎石を打ち込む撞木の上端部分で、行事の最後に切り落とされる。村人たちはこれを縁起物として奪い合った。

トウフヅクリ
豆腐の製造用具。

ミノゴモ
荷物を負うときの背中当て。

ソリ
荷物の運搬用。

屋根網
合掌造りの屋根に下げておき、修理や雪下ろしの際、上るのに使用した。

ヤネタタキ
屋根葺きの際、表面をならしたり、軒を揃えたりするのに使用した。

日本民家園だより　vol.74　発行：平成23年1月4日

川崎市立日本民家園　URL　http://www.city.kawasaki.jp/88/88minka/home/minka.htm
〒214-0032　川崎市多摩区枡形7-1-1　TEL　044(922)2181　FAX　044(934)8652　交通:小田急線「向ヶ丘遊園」駅下車南口より徒歩13分
開園時間　[11～2月]午前9時30分～午後4時30分　[3～10月]午前9時30分～午後5時　入園は閉園30分前まで
休園日　毎週月曜(祝日の場合は開園)、祝日の翌日(土・日曜の場合は開園)、12月29日～1月3日
入園料　一般500円、高校・大学生300円、65歳以上300円(川崎市在住の方無料)、中学生以下無料